

緑のまきば

1983 №20

小金井緑町教会
小金井市緑町四一十六一三三
電話〇四二三一八一七九六一
編集 牧師 山本圭一

人生の危機と信仰

マルコ3章13-16

山本圭一

I 「いま、私にとって大切なことは？」つきつめると人それぞれによって答えは違う。各自の健康、

重役をしているかつての友人が言った。「てっとり早く、その極意を教えて呉れないか。」

II

家庭の経済、平和な社会、福祉国家。「本当にそうだろうか。」これが現代、多くの人が持っている疑問である。「医学がどんなに進歩しても人は必ず死ぬ以上、医学は敗北の科学である。」聖隷ホスピス所長の原義雄先生はそう語られた。死の事実を踏まえ、科学の粋を集めて医療に取組んでこられた医師の言葉は、重い。「この世で満ち足りた人、名声や物、金をめあてに生きてきた人ほど、ガンと宣告されてあわてふためく。人生に哲学がなく、宗教が無いからである。」こうも話された。

話は古くなるが、幕末の江戸に千葉周作という剣の達人がいた。ある日若い茶坊主が訪ねてきた。「先生、きょう間違っって一人のお武家につきあたり、ならば真剣勝負と申しわたされました。夕刻お茶の水近くで立ち合わなくてはなりません。しかし私は剣には全くの不心得。見苦しい死に方を致したくありません。恥ずかしい死に方をしないよう、最後の心得をお教えいただけますとうございます。」

それでは、どうしたら死すべき人間がゆるぎない土台を、一回限りの人生に据えることができるのか。同期生会に行った時、会社の

千葉はそれを聞いて剣を正眼にかまえることだけを教え、次のように言いかけた。「いいか。眼をつぶって刀をかまえ、敵が動く気配を感じたら、刀をまっすぐに突き出す。それ以外のことは何もするな。」

さて、その夕刻教えられたように刀をかまえ、そこで死に果てようと決心していると、不思議なことに相手の武士は「少しの隙もないかかる武道の達人に、真剣勝負を申し込むが如き無礼をいたし、何とも申しわけがない。なにとぞお許し下され。」と謝り、その場から立ち去った、という。有名な話である。生死を離れて一心になら。そこで人生は転機を迎える。

かを試みている連中がいた。さらに病苦に悩むたくさんの人々が押し寄せていた。てんやわんやの人間世界は一心どころか思いは乱れに乱れていた。パリサイ人は日頃反目しているヘロデ党の者と、その時だけはイエスを殺すため手を組んだ。まっ暗闇に、静かに光る一条のともしび。闇の中にいる者は闇を見ることはできぬ。光を見て闇を知るのである。

III

「さてイエスは山に登り、み心にかなつた者たちを呼び寄せられたので、彼らはみもとに來た。」(マルコ3章13) 12人の弟子たちは無名の人たちであった。特別の教育を受けたのではない。しっかりと人生観を持ち、覚悟ができていたとは思えない。しかし主はこのような人を召された。「み心にかなつた者」としてである。私たちは皆目何もわかっていない。それでも「み心」に向って身をこまえる。生死を忘れてみ心を注視する。この世の動きを察したら、み心に向って、打ち込む。「みもとにきた」弟子は、み心に賭けた人々であった。主イエスはみ心に人生を賭けるように導かれた。これが礼拝だ。このデキストの前に安息日に片手のなえた人をダンにしてイエスがいやされるかどうか

「そこで十二人をお立てになつた」。立てる、ことの中には倒れんとする弱さ、罪の深さが洞察されている。倒れる者を、支え立てられたのだ。そして三つの内容が明言されている。(1)弟子たちを主のそばに置くため、(2)宣教につきわす、(3)悪霊を追い出す権威を持たせる。これが弟子たちの集中すべき眼目であった。だから私たちが、まず吟味しなければならぬ。次いで現況を把握する必要がある。一人一人の足下と私たちの教会の乏しいありようを知ることだ。そこから未来が見え始め、ここを突いたらよいノと心を定めよう。私たちがどんなに覚束なくとも、み心にかなる者として認知して下さる主が生き給う。これを覚知して共に一歩を踏み出すことだ。

IV